

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

家庭訪問の時の違和感を
放置した私に、
卒業直前の生徒が言った
「入学手続きは、しませんでした」

宮崎県立延岡星雲高校 柳井健二

やない・けんじ ● 同校に赴任して1年目。校長。
「その時に分かりやすいこと」よりも
「時間が経っても心に残る学びや姿勢」を
大切に、生徒の人生に深くかかわる
日々を歩んできた。



30代半ば、3年生の担任として生徒Aさんの家庭を訪問しました。家の中の様子からは生活に問題があるとは思っていませんでしたが、Aさんの母親が少し疲れた様子だったのが気になりました。しかし、当時の勤務校では、保護者の就労状況など、生徒本人の適性や能力に直接関係しない情報は収集しない方針だったため、私は何か引っかかるものを感じながらも保護者の仕事や家計などに立ち入ることはしませんでした。

大学入試センター試験（当時）の自己採点の結果、Aさんは第1志望の大学・学部ではなく、第2志望を受験し、合格しました。3月末に行われた離任式の日、近況報告のために職員室を訪れた卒業生たちの中にAさんの姿もありました。「下宿は決まった？」。何気なく尋ねた私に、Aさんは申し訳なさそうに言いました。「入学手続きは、しませんでした」。想定外の返事に驚いた私が「どうして？」と聞くと、Aさんは「家にお金がありません。1年間浪人して、自分で進学費用をためるよう、母から言われました」と答えました。その言葉を聞いて私は、家庭訪問の時の違和感に向き合えなかったことを心底後悔しました。その時点で私にできたことは、Aさんが短期間で大学の入学金と前期授業料に相当する金額を貯蓄できるよう、寮が完備された求人とAさんと一緒に探すことくらいでした。

目標の金額をためたAさんが数か月後に地元に戻ると、私は管理職に相談し、進路指導室に隣接する部屋をAさんの自習室として確保しました。同僚たちもAさんを気にかけて、学習に関する質問に答えるなどしてAさんの受験勉強を支えました。そして3月末、Aさんは私に受験の結果を報告しに来ました。「先生、合格しました。去年と同じ大学・学部です」。1年間でAさんの学力を伸ばし切ることができなかったことが申し訳なく、「おめでとう」の後に私の口から出た言葉は「ごめんね」でした。

もしも私が家庭訪問の時の違和感を放置せず、管理職に相談したり、進学に関して不安なことがないかAさんから丁寧に聞き取っていたりしていたならば、Aさんの人生は変わっていたかもしれません。教師として経験を積み、現役合格を実現するための進学指導はある程度できていたのかもしれないけれども、それぞれの事情を抱えながら進路を切り拓こうとする生徒を支援する進路指導は当時の私にはできていませんでした。教師としての未熟さを思い知らされた、忘れられない出来事です。

生徒の家庭の問題を教師はどのように把握し、それにどうかわればよいのか。柳井先生が、自身のその後の進路指導の変化と、校長になった今の思いを語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article32485/>